

水滸傳簡本淺探

—劉興我本・藜光堂本をめぐって—

丸山 浩明

はじめに

鷗外森林太郎の舊藏書一萬八千餘冊が東京大學附屬圖書館に寄贈され、その分類排架に先立って「鷗外文庫目錄・和漢書之部」が編まれたのは一九二六年(大正)七月のことであつた。ついで一九三〇年(昭和)、『斯文』第十二編三號に「水滸傳諸本」と題する神山閔次氏の一文が載り、江戸期佚名氏の「水滸刊本品類隨見抄之如左」が紹介され、「藜光堂本」の存在が知られた。かくてそれより幾何もなく一九三二年(昭和)、「既ニ佚セルニ似タリ」(神山文)と考えられていたその「藜光堂本」が實に鷗外文庫中に發見されたのである。發見者は當時東京帝國大學附屬圖書館に備の身分で勤務していた故石崎又造氏であるらしい。翌一九三三年(昭和)、石崎氏は「水滸傳の異本と其の國譯本」と題する論文を『圖書館雜誌』(第二十八年)に三回に亘つて連載した。その中、最も紙幅を割いて紹介しているのが「藜光堂本」であることは言うまでもない。

一方、長澤規矩也氏は、同じ頃、氏によればこの「藜光堂本の翻刻」と目される所謂「劉興我本」を入手、『書誌學』で紹介した。この本は戦後、雙紅堂主人長澤氏が故あつて東京大學東洋文化研究所に

割譲され、他の俗文學關係の蒐書と共に「雙紅堂文庫」として同所に收藏されることとなつた。(『雙紅堂文庫分類目錄』——一九六一——卷末の長澤氏「わが蒐書の歴史の一斑」には、昭和七年十一月に淺倉屋で入手したことが記され、また千葉鞠香舊藏本であつたことが原本見返しの長澤氏の識語によつて知られる。)かくて期せずして同系統に屬する珍本二部が本郷の地に集まつたわけで、そこに一種の奇縁を感じざるを得ない。

筆者は近年、水滸傳中の詩詞に關心を持ち、百回本・百二十回本等を調査するうちに、先の二種の百十五回本が、なおまだ充分には調査・検討の對象とされていないことを知つた。藜光堂本については先の石崎氏の紹介の他、白木直也氏が「文簡藜光堂本の研究」(『江戸期佚名氏水滸刊本品類隨見抄之研究』一九七二年自印所收)を發表され、また劉興我本については一九八六年に至つて劉世徳氏が「談『水滸傳』劉興我刊本——『水滸傳』版本探索之一——」(『中華文史論叢』總第四十輯、一九八六年第四輯)を發表したが、同系統に屬するこの藜光堂・劉興我兩本の關係については兩研究いずれにも觸れられていない。ひとり馬幼垣氏が、一九八七年八月臺北市で開催された「明代戯曲小説國際研討會」で「嵌圖本水滸傳四種簡介」と題する發表を行い、その中で繡像に付けられている標題の對校を手掛りとして「我懷疑劉興我

本早速黎光堂本」(劉興我本の成立は黎光堂本に先立つものではないか)と推測しているのみである。この馬氏の發表は筆者の調査と時期を同じくし興味を覺えたが、いずれにせよこの一・二年、資料の稀見な文簡本に對する關心が高まり、研究對象として見直され始めたことは確かであろう。

そもそも水滸傳の版本は、文章敘述の粗密により文繁本と文簡本とに大別される。

文繁本と文簡本との成立における先後關係は、版本の比較研究が進むにつれて、文繁本が先に出て、それを刪節した文簡本が後から出来たとする説が有力となった。

文繁本については、所謂天都外臣序本の詮索や李卓吾評の眞偽問題、百二十回本を挾んでの二種の百回本の區別等つとに多角度より研究が行われてきた。一方文簡本については、鄭振鐸の發見に係る所謂巴黎本即ち新刊京本全像挿增田虎王慶忠義水滸全傳を始めとして、日光慈眼堂藏の京本増補校正全像忠義水滸志傳評林、或いは所謂英雄譜本等限られた資料のみが對象とされてきた。然るに近年、先の馬幼垣氏が歐州各地の圖書館に埋れていた水滸傳の簡本數種を『中華文史論叢』(總第三十五輯、一九八五年第三輯)において紹介し、水滸傳版本研究に新たな一頁が加えられた。田虎王慶の二冠の語柄の存在を特徴とする文簡本の研究は、此に改めて総合的に比較検討されるべき機會を得ることとなった。

小論はこの趨勢を踏まえ、国内でも言及されることの少なかった表題に挙げた兩本について、これまでに筆者の行った調査結果を披瀝し、併せて他本との關わりからとりわけその先後關係及び文簡本系統上における兩本の位置を推定してみようとするものである。

一 劉興我本の書誌的概略

東京大學東洋文化研究所(雙紅堂文庫)藏。故長澤規矩也氏舊藏本。全八冊(一帙)。二十五卷一百十五回(目錄實回數は一百十四回)。本書は表紙・封面を缺き、序に始まる。目錄題は「鼎鑄全像水滸忠義誌傳」に作り、各卷首葉首行の内題は次のように二通りに分かれる。

1 新刻全像水滸傳 1 2 3 5 6 14 15 16 17 18 19 22 23 24 25 計十五卷
2 新刻全像水滸誌傳 4 7 8 9 10 11 12 13 20 21 計十卷

また目錄の終題は「全像水滸忠義誌傳」となっており、各卷末葉末行の後題は必ずしも全卷にはなく、計十四卷分のみ記され、次のように三通りに分かれる。

1 全像水滸傳 1 5 6 14 16 18 19 22 計八卷
2 全像水滸誌傳 8 9 10 20 計四卷
3 新刻全像水滸傳 7 21 計二卷

これらの題名に見られる特徴は、「全像」の角書を有し、また「水滸誌傳」の四字を用いている點である。「水滸志傳」なる題名は現在知られる水滸傳の版本中、他に「京本増補校正全像忠義水滸志傳評林」(以下「評林本」と略稱)を見るに止どまる。よって劉興我本はこの評林本と何らかの關係があらうと先ず豫想せられる。

また、この本の名稱については、卷一首葉の第二、三行下部に

錢塘施耐庵編輯

富沙劉興我梓行

と記すに因り、「劉興我本」と略稱される。地名富沙については官桂銓氏が

富沙即潭陽、潭陽即福建建陽

として、この本が所謂「建本」に属することを指摘している。また刊行者劉興我についても後述の藜光堂本の刊行者と同一人ではないかとの推測を下しているが、確證は得られていない。

本書は嵌圖形式、單邊、界線なし。縦二四・八×横一四・〇。框廓縦二一・一×横一一・九。本文の上部中央に圖があり、縦四・八×横八・六。また框廓外圖上に横八字の標題(框廓なし)がある。圖の左右は各二行三十五字、圖下は十一行二十七字、半葉滿字の場合計四三七字。正文を有する葉數を八七八として計算すると、約三十八萬四千字となる。なお卷四に缺葉があり、内容から見ると約一丁分の正文があったと考えられる。版心柱記には全書に亘り上部に「全像水滸傳」とあり、單魚尾、卷數、丁數を刻す。

刊記を缺くが、刊行年は序文の末尾に

戊辰長至日 清源汪子深書于巢雲山房(戊辰の歳の長至の日、清源(福建泉州)の汪子深、巢雲山房に書す)

とあるにより、崇禎元年(一六二八)と推定される。なお、汪子深については知る所がない。

二 藜光堂本の書誌的概略

東京大學總合圖書館藏。森岡外舊藏本として知られる。裏打ちを施した全八册(二帙)。二十五卷一百十五回(目錄實回數は一百十四回)。封面は上半部に「忠義堂」の繡像があり、下半部に「全像忠義水滸」を二行に分けて大書し、その間に「藜光堂藏板」とある。次に「溫陵雲明鄭大郁題」と署された「水滸忠義傳敍」を置く。この鄭氏並びにその序については、つとに白木直也氏が、溫陵という原籍から思想的に李贄の流れを汲む人物と考えられるが、鄭序は容與堂本に題

された李贄の「忠義水滸傳敍」の燒き直しであり、恐らく書肆がその名前を利用して假託したものであるかと指摘している。鄭序の「忠義」を鼓吹する内容及び語句が李序の體のよい換骨奪胎に過ぎない點は確かであるが、いずれにせよ鄭大郁という人物が李贄派に列なり且つ地方的に名聲のあつた者であることは想像に難くない。

目錄題は「鼎鑄全像水滸忠義志傳」とあり、劉興我本に同じい。各卷首葉首行の内題は次の五通りに分かれる。

- | | | |
|---|------------|--|
| 1 | 新刻全像水滸傳 | 2 3 4 6 7 8 11 13 14 15 16 17 19 20 21 22 23 24 25 |
| | 計十九卷 | |
| 2 | 新刻全像水滸忠義傳 | 5 12 計二卷 |
| 3 | 新刻全像水滸志傳 | 9 18 計二卷 |
| 4 | 新刻全像忠義水滸傳 | 10 計一卷 |
| 5 | 新刻全像忠義水滸誌傳 | 1 計一卷 |
- となるが、二十五卷すべてに共通するのは「新刻全像」の角書であり、また「忠義」の二字を有する卷があるのを特徴とする。この「忠義」二文字に對する意識が強く働いていることは、全卷の版心に「忠義水滸」と刻されていること及び先に觸れた鄭大郁の序からも窺われる。各卷末葉末行の後題は次の十卷分のみに記載され、各卷首の題名にもまして統一を缺く。
- | | | |
|---|----------|----------------|
| 1 | 全像水滸傳 | 4 13 19 22 計四卷 |
| 2 | 忠義水滸傳 | 1 16 計二卷 |
| 3 | 全像忠義水滸傳 | 25 計一卷 |
| 4 | 全像忠義水滸志傳 | 20 計一卷 |
| 5 | 新刻全像水滸傳 | 17 計一卷 |
| 6 | 忠義水滸 | 7 計一卷 |

の如くである。その他(26 10 11 12 14 15 24)は題を缺き、単に「幾巻終」と記すのみである。

卷一首葉の第二、三行に編者及び刊行者名が見え、

清源姚宗鎮國藩父編 武榮鄭國揚文甫父全校
書林劉欽恩榮吾父梓校

とある。編者は清源(福建泉州)の姚宗鎮、字は國藩、校訂者は武榮(福建泉州)の鄭國揚、字は文甫である。封面と合わせると刊行者は藜光堂主劉欽恩、字は榮吾ということになる。この劉榮吾については、同姓でもあり、富沙の劉興我と同一人もしくは關係の深い人物とも考えられるが、なお推測の域を出ない。尤も清源・武榮・溫陵いずれも泉州に屬するところから、本書は泉州で出版された可能性ありと考えるならば、同姓ではあっても建陽の劉興我との結びつきはむしろ弱まると思われる。またここで注意すべきは編者としての羅貫中や施耐庵の名が見られない点である。これは水滸傳の作者としては羅施の名が已に廣く知られ、ためにそれを掲げずして、藜光堂が元になった版に新校訂を施したとの觸込みで賣り出そうとしたことに因るものかと想像される。

本書は嵌圖形式。單邊、界線なし。縦二三・四×横一三・九。框廓縦約二一・二×横一一・九。本文の上部中央に圖があり、圖は縦四・三×横六・九。また框廓圖上に横八字の標題があり、縦〇・九×横八・六。單邊で圍まれている。圖の左右は各三行三十四字、圖下は九行二十七字、半葉滿字の場合四四七字。亂丁が二箇所あるが、正文を有する葉數を八六三として計算すると約三十八萬六千字弱となる。版心柱記には全書上部に「忠義水滸」とあり、單魚尾、卷數・丁數を刻す。なお卷一の三・五・六丁、卷四の十六丁と卷二十の

十七丁の版心丁數下部には「藜光閣」の三字を刻す。

この他、この藜光堂本の性格を暗に物語る點としては、卷十八末尾において正文が版木の未行に及び、未刻部分に餘裕がないことから題名を省略してただ「終」一字のみを刻していること、卷二十四・二十五において、ともに正文數行が次葉にかかるとを恐れて末尾の一部(卷二十五では七律一首)を亂暴にも削除し二版本に跨るのを防いでいること等が挙げられる。これらの事象はいずれも書肆が努力を省こうとしたか、もしくは刊行を急いだがために起こったことではないかと考えられる。

なお形式の面から見ると、圖の左右を三行とする嵌圖本はこの藜光堂本の他に「慕尼黑本」(半葉滿字五〇六字)・「李漁序本」(半葉滿字五五二字)(いずれも共に馬氏命名の呼稱に従う)がある。この兩本ともに筆者は未見であるが、後述の劉興我本との先後關係・卷末から窺われる省力化の傾向、李漁の生卒年・行款字數から、或いはこの藜光堂本が圖の左右を三行に擴げる形式の先驅かもしれない。この點は今後の解明に俟つ。

三 卷數・回目から見た兩本

劉興我本(以下、劉本と略稱)、藜光堂本(以下、黎本と略稱)均しく二十五卷、一百十五回(目錄實回數は一百十四回)であり、その分卷の情況は全く一致する。次に百回本(天都外臣序本及び容與堂本)、挿増本(馬幼垣氏調査による六本)、評林本の各回目と比較對照すると左表の如くなる。(因みに、劉本・黎本では、正文の回目と目錄の回目との相違が多く認められる。この表では正文もしくは目錄の回目のうちいずれか一方でも他本と合致したものには○印を付した。また劉・黎兩本を除き、他

の三本中で一致したものは△印、一本のみ異なる場合には×印をつけた。
 始めに、劉・黎兩本の回目上の特徴を考えると次の三點が指摘出来る。
 (以下回数、劉・黎本のそれを以て示す。)

(一) 兩本共通の不備

兩本には共通して、目錄・正文間の不一致が見られる。

①第九回 劉・黎兩本とも目錄には「豹子頭刺陸謙富安 林冲投五庄客向火」とあるも正文には對應する回目がなく、第八回に併合され

た形を採る。(評林本も同じ。)

②第百十三回 劉・黎兩本とも正文では第百十三回回目を「盧俊義大戰昱嶺關 宋公明智取清溪洞」に作るも、目錄ではこの該回が脱落し、第百十三回「魯智深杭州坐化 宋公明衣錦還鄉」と、正文の第百十四回に當たる回目に續けている。ために以下正文と目錄との間にずれを生じ、正文の第百十五回が目錄では百十四回に繰り上る結果となった。即ち目錄に依る限りでは百十四回本ということになる。

百回本	挿増本	評林本	劉興我本	黎光堂本	回目の相違				
					百	挿	評	劉	黎
引		(引)	(引)	(引)					
1		1	1	1	○		○	○	○
2		2	2	2	○		○	○	○
3		3	3	3	×		○	○	○
4		4	4	4	○		○	○	○
5		5	5	5	○		○	○	○
6		6	6	6	○		○	○	○
7		7	7	7	○		○	○	○
8		二	二	二					
9		8	8	8	○		○	○	○
10		(9)	(9)	(9)					
11		10	10	10	○		○	○	○
12		11	11	11	○		○	○	○
13	三	12	12	12	△		△	○	○
14		13	13	13	△		△	○	○
15	14	14	14	14	○	×	○	○	○
16	15	15	15	15	×	○	○	○	○
17	16	16	16	16	○	×	○	○	○
18	17	17	17	17	×	○	○	○	○
19	18	18	18	18	×	○	○	○	○
20	19	19	19	19	○	○	○	○	○
21	20	20	20	20	○	○	○	○	○
22	21	21	21	21	○	○	×	○	○
23	22	22	22	22	○	○	○	○	○
24	23	23	23	23	○	○	○	○	○
25	24	24	24	24	○	○	○	○	○

百回本	挿増本	評林本	劉興我本	黎光堂本	回目の相違				
					百	挿	評	劉	黎
26	25	25	25	25	別	別	○	○	○
27	26	26	26	26	×	○	○	○	○
28	27	27	27	27	○	○	○	○	○
29	28	28	28	28	○	○	○	○	○
30	29	29	29	29	×	○	○	○	○
31	30	30	30	30	○	○	○	○	○
32	31	無	31	31	△	△	∖	○	○
33	32	31	32	32	○	○	○	○	○
34	33	32	33	33	×	○	○	○	○
35		∖	∖	∖					
36		33	34	34	○		○	○	○
37		∖	∖	∖					
38		34	35	35	○		○	○	○
39		35	36	36	○		○	○	○
40		無	37	37	○		∖	○	○
41		36	38	38	○		○	○	○
42		無	39	39	○		∖	○	○
43		無	40	40	○		∖	○	○
44		38	41	41	×		○	○	○
45		39	42	42	○		○	○	○
46		40	43	43	×		○	○	○
47		無	44	44			∖	○	○
48		∖	∖	∖					
49		41	45	45	○		○	○	○
50		42	46	46	×		○	○	○

この他、共通の不一致としては、

③第二十五回 目録「鄆哥知情報武松 武松怒殺西門慶」正文「鄆哥報知武松 武松殺西門慶」

④第三十六回 目録後片「梁山泊戴宗傳假名」、正文後片「梁山泊戴宗假信」

⑤第七十八回 目録「宋江奉詔破大遼 陳橋驛揮淚斬卒」、正文「宋江明奉詔破大遼 陳橋驛滴淚斬小卒」

水滸傳簡本淺探

⑥第一百二回 目録後片「李戎智取白牛鎮」、正文後片「李雄敗死白牛鎮」

等が挙げられる。また⑥に見られる如く、「宋江」と「宋公明」、「盧俊義」と「俊義」の類の、呼稱の統一を缺く例が多い。

(二) 兩本における小異

①第五十三回 劉本は目録「二山」正文「三山」、黎本は目録・正文ともに「三山」。劉本目録の誤刻であらう。

②第八十七回 劉本は目錄前片「再訪」正文「訪」、回目後片は劉・黎本ともに同じい。劉本に存する「再」字は、挿増本・評林本との關係が深いことを示すものと考えられる。

③第百十五回 劉本は目錄「徽宗」三字闕「梁山泊」正文「徽宗帝夢遊梁山泊」、黎本は目錄「徽宗夜夢遊梁山泊」正文「徽宗夢遊梁山泊」。

これらの異同は、劉本目錄の未定を示す赤字になお問題が残るものの、やはり黎本の粗雑さを表すものであり、劉本が他三本と近い關係

にあることを示唆する。
 (三) 黎本の粗雑なる點

先の二點を除く他に兩本の目錄と正文との相違から指摘出来ることは、劉本にあっては目錄と正文とが一致しているのに反し、黎本は不一致が目立つという點である。例えば、

①第三十回 目錄「都監血濺鴛鴦樓 武行者夜走蜈蚣嶺」
 都監血濺鴛鴦樓 武行者夜走蜈蚣嶺

百回本	挿増本	回目の相違							
		評林本	劉興我本	黎光堂本	百	挿	評	劉	黎
51		43	47	47	△		△	○	○
52		無	48	48			／	○	○
53		44 十一	49 十一	49 十一	○		○	○	○
54		45	50	50	×		○	○	○
55		46	51	51	×		○	○	○
56		47	52	52	○		○	○	○
57		／	／	／					
58		48 十一	53 十一	53 十一	○		○	○	○
59		49	54	54	○		○	○	○
60		50	55	55	×		○	○	○
61		51	56	56	○		○	○	○
62		52	57	57	○		○	○	○
63		53 十三	58 十三	58 十三	○		○	○	○
64		54	59	59	×		○	○	○
65		55	60	60	×		○	○	○
66		56	61	61	○		○	○	○
67		57	62	62	○		○	○	○
68		無 十四	63 十四	63 十四			／	○	○
69		58	64	64	×		○	○	○
70		59	65	65	△		△	○	○
71		60	66	66	○		○	○	○
72		61	67	67	○		○	○	○
73		62	68	68	×		○	○	○
74	74	63	69	69	○	○	○	○	○
75	75	64	70	70	×	○	○	○	○

百回本	挿増本	評林本	劉興我本	黎光堂本	回目の相違				
					百	挿	評	劉	黎
76	76	65	71	71	△	△	○	○	○
77	77	66	72	72	○		○	○	○
78	78	67	73	73	○	×	○	○	○
79	79	68	74	74	○	○	○	○	○
80	80	69	75	75	○	○	○	○	○
81	81	70	76	76	○	○	○	○	○
82	82	71	77	77	△	/	△	○	○
83	83	72	78	78	○	△	△	○	○
84	84	73	79	79	△		△	○	○
85	85	\	\	\					
86	86	74	80	80	○	○	○	○	○
87	87	\	\	\	△	乙△			
88	87	75	81	81	○	○	○	○	○
89	88	76	82	82	○	○	○	○	○
90	89	77	83	83	○	○	○	○	○
	91	78	84	84		○	○	○	○
	91	79	85	85		○	○	○	○
	92	80	86	86		○	×	○	○
	93	81	87	87		○	○	○	×
	94	82	88	88		○	○	○	○
	90	83	89	89		○	○	○	○
	95	84	90	90		○	×	○	○
	96	85	91	91		△	△	○	○
	97	無	92	92		○	/	○	○
	98	86	93	93		○	○	○	○

②第三十七回 目錄「白龍・唐英雄小聚義」、正文「白虎・廟英雄小聚義」

一、評林本との關係

③第九十四回 目錄「宋江承命討淮西」、正文「宋江承命討淮南」

これらはいずれも黎本の粗雑さを示すものと考えられる。

次にこの表から窺われる兩本と他三本（即ち百回本・挿増本・評林本）との回目上における關係を見ると、以下の點を指摘することが出来る。

- 47（評43）・71（評67）
- (1) 百回本と評林本との結びつきが強いと考えられる回……12・13・
- (2) 評林本のみ他本（百回本もしくは挿増本、劉・黎本）と異なる回……
- 21・86（評80）・90（評84）・107（評97）
- 二、挿増本との關係
- (1) 百回本・評林本と一致し、挿増本と異なる回……14・16・73・101

これら分巻の仕立て方と回目とから歸納して言えることは(表參照)、次の三點に絞られよう。

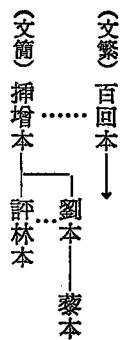
(一)百回本からの影響に關しては、劉・黎兩本は、挿増本・評林本と等間隔の關係にあるのではないかと考えられる。

(二)劉・黎兩本については、評林本との關係は勿論のこと、挿増本中の梵帝崗本との關係がかなり強いと想像される。

(三)劉本と黎本との關係については、劉本に誤刻不備等が少ない點か

ら推して、黎本より先に成立したものではないかと推測される。なぜならばもし假に劉本が黎本を繼承しているとすれば、その誤刻不備等も踏襲される可能性が大きいからである。よって挿増本の成立年代が他本に比べて早いとした場合、左のような系統圖を想定することが出来る。

百回本	挿増本	評林本	劉興我本	黎光堂本	回目の相違				
					百	挿	評	劉	黎
	98	87	94	94		乙	○	○	○
	99	88	95	95		○	○	○	○
	100	無	96	96		○	∖	○	○
	99	89	97	97		○	○	○	○
	100	90	98	98		△	△	○	△
	101	91	99	99		○	○	○	○
	102	92	100	100		○	○	○	○
	103	93	101	101		×	○	○	○
	104	無	102	102		△	∖	△	△
	105	94	103	103		○	○	○	○
	106	95	104	104		△	△	○	○
	107	無	105	105		○	∖	○	○
	108	96	106	106		△	△	○	○
91	109	97	107	107		○	○	×	○
92	110	98	108	108		○	○	○	○
93	∖	∖	∖	∖					
94	111	99	109	109		○	∖	○	○
95	112	100	110	110		○	○	○	○
96	112	101	111	111		○	○	○	○
97	114	102	112	112		○	○	○	○
98	113	無	113	113			∖	∖	○
99	115	103	114	114		×	○	○	○
100	120	104	115	115		○	乙	○	×



四 正文から見た兩本

へ一 敘述部分

己に上述したところによって劉本と藜本とは分巻・回目・總字數の上から非常に親密な關係にあることが判明した。しかし一方、字句を對校した結果、微妙な差異があることも知られた。となれば、同じ簡本系の評林本や挿増本との對校もまた必要となる。そこで先ず散文の敘述部分(所謂地の文)から例を採り、その特徴を考えてみたい。

一、劉・藜兩本と評林本(第三十回)

劉・藜・評三本に共通の部分には傍點、を施し、劉本の字句には傍線——を、藜本の字句には()、評林本の字句には()をつける。

當(日)(時)武松尋思半晌、怨恨冲天(日)若不殺張都監、如何出得這(口)氣、便去屍(身)上(取)「解」下(二)(二)「把(好朴刀)(尖刀)、再回孟州城來、黃昏時(分)「候」轉到張都監後花園城外、却是一個馬院、只見後槽提個燈籠出來、(上)「願」草料、被武松(隨勢槍入來、把這)「黑影裡揪住」後槽(住)「問」曰、你認得我麼、後槽(聽)「認」得(聲音是武松)「是武松聲音」、便叫(日)哥哥不(武都頭非)干我事。

この引用文は、の部分と、()の部分とを並べれば評林本の文章となり、同じく——部分を並べれば劉本、()部分を並べれば藜本の文章となる。この異同より先ず言えることは、——の部分と()の部分とがおおむね重なることから劉本と藜本との關係は濃厚であるという

點である。また劉・藜兩本は評林本と細部において異同はあるもの、文章の構成及び粗密の點については大差なきものと認められる。

二、劉・藜兩本と評林本(第六十七回)

(用いる符號・方法は例一と同じ)

宋江與柴進一路、史進與穆弘一路、魯智深與武松一路、朱全與劉唐一路(其餘守寨)(次序分進)。李逵曰我也同去、宋江曰你去不許惹事、(交)(教)燕青和你(作伴)(同去)、(宋江是個紋面)(但得你是黑面)的人、如何去得京師、却得安道全上山把毒藥與他點去了、(後用良金)(方可同行)美玉碾末、每日塗(捺)「茶」自然消了。

ここで注目されるのは、()の部分と——の部分とがほとんど重なっている點である。これは即ち評林本と劉本との結びつきが強いことを示すものである。

以上の二例について見るに、劉本は評林本・藜本の兩本に關係があり、従つてその中間に位置するのではないかと考えられる。

三、劉・藜兩本と評林本・挿増本(第一百回)

ここでは挿増本(梵帝崗本)を基底とし、劉・藜兩本と重なる部分には傍點、を、評林本と重なる部分には傍線——を施す。従つて挿増本・評林本・劉藜兩本に共通する部分には、——と——の兩方がつけられる。評林本に見られる字句は()で括り、劉・藜本に見られる字句は()で括ることとする。なお、この引用部分における劉本と藜本との間には全く出入なきことを斷わっておく。

宋江撥十員將佐鎮守梁州、朱武董平楊志徐寧索超樂進穆弘雷橫楊雄石秀(等十將鎮守)(梁州)、其餘大隊人馬望滎陽進發、令戴宗催趕「促」水軍進越江相會、只「文」見李逵來帳中見宋江道(日)「哥哥這番行兵如何不與我們(去)出戰、此去(我要領兵)攻打(取)

逃陽、須我當先、宋江道(曰)此去須用你只是淮西路徑叢(甚)難、恐你殺入重地、怕有疎失、因此不令你(汝)行、今既要攻取逃陽也須得個幫護之人我纔放心、只見項充李逵鮑旭三個回前道、哥哥我等同去帳前轉過、潘迅孫安栢森和(鄂)(全忠計)(許)(宣沉安仁六個齊道(曰)你三個也不識路徑、小將等識(認)得此間地勢(理)、願帶李兄弟(哥哥)同去立功、宋江(道曰)(各宜用心、點一萬騎軍(人馬)與李逵等先行、自率(統)大隊人馬隨後而進。

ここに認められる特徴は次の三點である。

(1) 文章は挿増本の方がはるかに複雑である。

(2) 評林本は挿増本の骨組み及び字句を繼承している。

(3) 劉・黎兩本は評林本とほぼ重なるも、細かい點で異同が見られる。つまり評林本の字句は、挿増本と劉・黎兩本との間に位置する形で、兩者に深い關係を持つていと言ひ得よう。

以上、散文の敘述部分三例の比較から導き出される大まかの結論は、劉・黎兩本では評林本と劉本とがより親密な關係にあり、黎本は劉本と字句上において些か異同があるということである。(例えは先の例一において、劉本が評林本同様「哥哥」という呼稱語を用いているのに對し、黎本のみ「都頭」という異なる呼び方をしている。)

また試みに例一・二を文繁百回本と比較してみたところ、評林本・劉本の字句と百回本の字句との結びつきが強く、黎本は評林本・劉本に比べて異同が多いという事實も明らかになった。

〈二〉 挿入詩詞

章回小説を読む場合、當然のことながら散文の敘述部分と韻文的要素としての詩詞駢語との相關關係を無視することは出来ない。對象とした兩本が所謂文簡本であるとは言え、詩詞が織り込まれていること

には注意を要する。その特徴を考察することは、他本との影響關係を推し量る上で一つの極手ともなり得ると考へる。ここでは從來あまり検討が加えられなかつた詩詞駢語に焦點を絞リ、文繁百回本中の詩詞との比較對照も行いながら、改めて劉・黎兩本の關係を検討してみたい。

(一) 詩詞駢語の出入について

始めに兩本における詩・詞及び駢語の總數とその特徴について見ておきたい。

劉本は詩三百四十五首、詞二十八首、駢語四十一段、黎本は詩三百四十四首、詞二十八首、駢語四十一段、兩本とも韻文的要素としての詩詞駢語だけで約四百十首も挿入されている。この他にも釋家の偈文等が見られる。この事象は、兩本が文簡本とは言え、文繁百回本の八百三十首、及び百二十回本(楊定見編・袁無涯刻本)の五百七十首との比率から推して、かなりの數量と見なさなければならぬ。なお兩本の詩一首分の差は、第一百十五回末尾の七律(「生當廟食死封侯」に始まる)の有無によるものであり、その他の詩詞駢語は形式・挿入位置等すべて合致する。

詩詞の總數から指摘出来る點は、詩が詞の數よりも壓倒的に多いということである。その差を生ぜしめた一要因は各回首入話に置かれた七言律詩(六十九首)にある。また文繁本では詩詞數の比率がこれほどまでに距たらぬことを考へると、文簡本の特徴は詞や駢語の如く比較的多くの行數(スペース)を必要とする要素をいかに犠牲にしてるかという點にある。

また形式の面から見ると、詩については七言絶句が壓倒的に多く、約六十パーセントを占める。次いで七律が二十八パーセント弱、その

百回本	① 仗義是林冲 爲人最朴忠 江湖馳聞望 慷慨聚英雄 身世悲浮梗 功名類轉蓬 他年若得志 威鎮泰山東	(11)
志傳評林本	仗義林冲最朴忠 馳名慷慨聚英雄 身世如今浮萍梗	(10)
劉興我本	仗義林冲最朴忠 馳名到處聚英雄 身孤恰似浮萍梗	(10)
蔡光堂本	仗義林冲最朴忠 馳名到處聚英雄 身孤恰似浮萍梗	(10)
	② 朝磨暮拆走天涯 坐趨行催重可嗟	(30)
	朝磨暮拆走天涯 坐鑿行催重可嗟	(29)
	朝磨暮拆走天涯 坐趨行催實可嗟 岡上大虫憑勇殺 縣中奸猾逞舉槎 快活林中生殺氣 恩州牢內受波渣 多謝施恩親餽送 稜七義氣最堪誇	(29)
	劉本に同じ	(29)

水滸傳簡本淺探

百回本	③ 克減官人不自羞 被人刀故一身休 宋江軍令多嚴肅 流汨軍前斬卒頭	(83)
志傳評林本	尅減君頒到憤響 一時憤發中奸謀 宋江號令多嚴肅 正法軍前淚墮流	(72)
劉興我本	尅減君頒致搆仇 一時憤發中奸謀 宋江號令多嚴肅 正法軍前墮淚流	(78)
蔡光堂本	劉本に同じ	(78)
	④ 巨耐禿囚無狀 做事只恁狂蕩 暗約嬌娥 要爲夫婦 永同鴛帳 怎禁貫惡滿盈 玷辱諸多和尙 血泊內 橫屍里巷 今日赤條條 甚麼模樣 立雲齊腰 投岩喂虎 全不想祖師經上 目連救母生天 這賊禿爲娘身喪	(46)
	耐禿禿囚無狀 做事直恁狂蕩 暗約嬌娥 要爲夫婦 永同鴛帳 怎禁貫惡滿盈 玷辱諸多和尙 遭勒殺死 二屍里巷 今日赤條條 甚麼模樣 立雲齊腰 投岩喂虎 全不想祖師經上 目連救母生天 這賊禿爲娘身喪	(40)
	耐禿禿囚無狀 做事直恁狂蕩 暗約嬌娥 要爲夫婦 永同鴛帳 怎禁貫惡滿盈 玷辱諸多和尙 遭勒殺死 二命于里巷 今日赤條條 甚麼模樣 立雲齊腰 投岩喂虎 全不想擔頭經上 目連救母生天 這賊禿爲娘身喪	(43)
	耐禿禿囚無狀 做事直恁蕩 暗約嬌娥 要爲夫婦 永同鴛帳 怎禁貫惡滿盈 玷辱諸多和尙 遭勒殺死 二命于里巷 今日赤條條 甚麼模樣 立雲齊腰 投岩喂虎 全不想擔頭經上 目連救母升天 這賊禿爲娘身喪	(43)

一四七

他は五言詩・古詩である。詞については所謂中調程度のもものが大半を占める。

□ 詩詞の異同について

次に兩本の詩詞について、その字句の異同を評林本及び百回本と比較してみることにする。

前頁の表から窺われる劉・黎兩本の詩詞の特徴は次の三點である。

(1) 劉本と黎本との結びつきは強い。

例②③及び④の如く、評林本と劉・黎兩本との間には字句の差異が認められる。

(2) 評林本・劉本・黎本三本の結びつきは強い。

これは本來文簡本系に屬する三本である以上當然のことであるが、例①③の如く文繁百回本に對してこの三本が別系統のグループをなすことが確認される。

(3) 黎本のみ小異が見られる。

例④の如く、劉本が評林本もしくは百回本と字句を同じくしても、黎本のみは字句を異にする。これは劉・黎兩本の關係において黎本が劉本を改作もしくは誤刻した可能性を示すものである。

以上、詩詞の對校から指摘出来る點は、劉本の字句が、やはり評林本と黎本との中間に位置する状態で、兩者に關係を持つことである。

なお、散文の敘述部分に對する韻文という見地から、王利器氏の「水滸」留文索隱」(『耐雪堂集』中國社會科學出版社、一九八六年十月)

を手掛りとして、格言や對句を含む六十二例を調査した結果によれば、詩詞駢語中に織り込まれて用いられている二十三例の留文の他、兩本には單獨の對句等は見られないことが判明した。これはやはり文簡本という兩本の性格を示している一事象と考えられる。

この他、兩本の調査から氣づいた點を付け加える。

一つは第六十六回、一百八好漢の席次についてである。七十二地煞星と謳っているにも拘らず、劉・黎本ともに七十名に止どまり、「地健星險道神都保四」と「地耗星白目鼠白勝」の二名が脱落している。

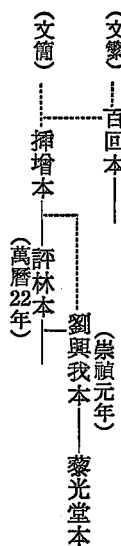
加えて黎本は劉本に比し粗雑な點が多く、地煞星中に同宿星の名が重複したり、他本が「地微星」となっている處をひとり「地獄星」に作ったりする。またこの席次の部分について評林本に當たつてみたところ、六十九名のみを記し、先の二名の他に「地賊星鼓上蚤時遷」を缺く。この同じ箇處が脱落していることから評林本と劉・黎本とは互いに關係のあることが想定される。

二點目は圖の標題についてである。兩本とも「全像」を謳う嵌圖本であり、その圖には八文字の標題を附す。劉本と黎本とでは丁數が異なるため、當然圖の總數にも差を生ずるが、劉本八七七圖、黎本八六二圖に附けられた標題はほぼ一致を見る。しかしここでも黎本の粗雑さが目立つ。例えば卷二十一の十丁裏・十一丁表において、劉本は「王慶賣弄鎗棒勢法」「段三娘問王慶取錢」の順に標題が記されているのに對し、黎本は誤って「段三娘問王慶取錢」を二度用いている。この類の誤りは卷四の十五丁表や卷二十一の二十丁表にも見られる。劉本にも誤刻不備がないわけではないが、その度合は黎本に比し極めて低いと言い得る。

結 び

以上、分卷の状況、回目、敘述部分及び詩詞の對校の結果に基いて劉・黎兩本の特徴を探ってみた。そこでこれを前提として、さらに兩本の系統上の位置について考えてみたい。

評林本の成立が刊記に「萬曆甲午季秋月書林雙峰堂余文台梓」とあるにより萬曆二十二年（一五九四）、劉興我本の成立が序文の紀年によって崇禎元年（一六二八）であることから左の如き系統圖が導き出される。



これにより、もしもこの推定に誤りがなければ劉・黎兩本の先後關係は、「劉本は」黎光堂本ヲ翻刻シタルモノ」（『雙紅堂文庫分類目錄』の長澤氏自身による解題）とする長澤説とは逆の結論に到達する。

ともあれ、小論で取り上げたのは水滸傳簡本中の劉・黎兩本に過ぎない。この他になお馬氏の所謂慕尼黑本・李漁序本の二種がある。これら計四種の嵌圖本・百十五回本（慕尼黑本については推測）のグループは、その相互の調査解明を待つており、その上で水滸傳の版本系統における位置づけが改めて検討されねばならないであろう。煩瑣を避けず加えた小論の考察がそのための一礎石とならば幸いである。

注(1) この鷗外遺書寄贈の経緯については、當時同圖書館に關係のあった女孀山田珠樹氏の「鷗外文庫寄贈願末」（『小展室』、六興商會、一九四二年）に詳しい。

(2) 『書誌學』第三卷五號「現存明代小説書刊行者表初稿（下）」（一九三四年十一月）、同第八卷五號「家藏中國小説書目」（一九三七年五月）

(3) 歌舞伎座の創立者千葉勝五郎の子で、藏書家としても知られた。本名は鏡藏、掬香は號。一八七〇—一九三八。

(4) 拙稿「『水滸傳』中の詩・詞について——百回本から百二十回本への

過程——」（『松學舎大學人文論叢』第三十四輯、一九八六年十月）

(6) 孫楷第『日本東京所見小説書目』では初版以來、兩本に關する記述は見られず、最近の馬蹄疾編『水滸書錄』（上海古籍出版社、一九八六年七月）でも、黎光堂本については神山氏の説を、劉興我本については長澤氏の説及び薄井恭一氏の『明清挿圖本圖録』（薄井君入管記念會編、一九四二年）の解説を襲っているに過ぎない。また、大内田三郎氏は「水滸傳版本考」と題する論文（副題を持つ數本）で百十五回本を採り上げておられるが、氏の言う「百十五回本」は「英雄譜」（二十卷百十五回）及び「漢宋寄書英雄譜」（六十卷百十五回）であり、劉興我本・黎光堂本には言及がない。

(6) 馬幼垣氏の發表に關する資料は、大塚秀高氏より惠與していただいた。記して謝意を表する次第である。なお同發表資料中で、德國國家圖書館に鄭大郁の序を有する黎光堂本の翻印と思しき「親賢堂本」なる一本が存在することに觸れているが、詳細は明らかにされていない。

(7) 劉世徳「談『水滸傳』劉興我刊本——『水滸傳』版本探索之一——」（『中華文史論叢』總第四十輯、一九八六年第四輯）では、卷末題名の調査結果に小稿と若干の異同が見られる。

(8) 孫楷第『中國通俗小説書目』・『日本東京所見小説書目』及び馬蹄疾編『水滸書錄』参照。

(9) 「『水滸傳』的黎光堂本與劉興我本及其它」（『文獻』第十一期、一九八二年三月）。のち『文學遺產』一九八四年二期（一九八四年六月）に轉載された。

(10) 長澤規矩也「家藏中國小説書目」及び「雙紅堂文庫分類目錄」では「明崇禎刊」とある。また注(7)劉文でも理由を擧げて崇禎間刊行説を支持する。

(11) 石崎又造「水滸傳の異本と其の國譯本（二）」（『圖書館雜誌』第二十八年二號、一九三三年二月）では、「裝釘も同氏（森鷗外）の趣向にな

るもので裏打を施す。全八冊（原本も八冊なりしこと明かなり。）とある。目錄欄外に「聖嘆本以校」とある點、改装した後鴨外自身の筆で題簽を記している點から推して、鴨外がこの本に随分と愛着を持っていたことが窺われ、また鴨外が幸田露伴連と「めざまし草」（第二十卷、明治三十年八月）に水滸傳合評を發表したことも思い合はされる。なお注（14）参照。

(12) 鄭大郁については知る所がほとんどない。ただ筆者は偶々「篆學入門」(『和刻本書畫集成』第八輯、汲古書院、一九七六年所收)なる書の著者が同姓名であることを知り得た。この本の首葉には「溫陵鄭大郁孟周父輯」と記され、長澤規矩也氏による解題では、「明鄭大郁、京都柳枝軒小川多左衛門刊本半長一冊」「本書四庫未收。著者は明史に傳がなく、本書の首によれば、字は孟周。」と述べられている。もし同一人とすれば、序の「雲明」は號と見なすことが出来る。またこの鄭氏並びにその序については、白木直也「文簡黎光堂本の研究」(『江戸期佚名氏水滸刊本品類隨見抄之研究』一九七二年自印所收)で考察が加えられている。

(13) 注(9)官桂銓文に同じ。
 (14) 卷二の十八・十九丁は前後しており、鴨外もそれに気づいて自ら丁數を打ち直している。もう一箇所は卷十六の二丁目が卷十五の二十丁前に來ている。

(15) 馬幼垣「現存最早の簡本《水滸傳》——《挿増本》的發見及其概況——」(『中華文史論叢』總第三十五輯、一九八五年第三輯)の注⑩における記述、及び前掲注(6)「嵌圖本水滸傳四種簡介」發表資料に基づく。

(16) 前掲注(15)「現存最早の簡本《水滸傳》——《挿増本》的發見及其概況——」中に挙げられた「斯圖加特本」「哥本哈根本」「巴黎本」「牛津殘葉」「德勒斯顿本」「梵帝崗本」の六本を指す。

① 「斯圖加特本」：卷二(回数不詳)卷三(第十三回)～卷七(第三

十三回、但し回末を缺く)。

② 「哥本哈根本」：卷十五(回数不詳の部分があり、第七十四回より明白)～卷十九(回目不詳)、前の卷十八は第九十一回。但し回の重複あり。

③ 「巴黎本」：卷二十(第九十九回)～卷二十一(第一百二回)但し回の重複あり。

④ 「牛津殘葉」：卷二十二(回目不詳)。

⑤ 「德勒斯顿本」：卷十七(第八十三回)～卷二十(第九十八回)但し回の重複あり。

⑥ 「梵帝崗本」：卷二十一(第九十九回)～卷二十五(第一百二十回)但し回の混亂あり。

以上が六殘本の概容であるが、全回が存する譯ではない。よって表の挿増本の欄も比較對照の可能な回に限って調査結果を記入した。なお馬氏は①～④を挿増甲本、⑤⑥を挿増乙本として區別している。

(17) 梵帝崗本の分巻の仕立て方が二十五卷である點、回目が評林本・劉・黎兩本とはほとんど一致する點から測られる。

(18) 前掲注(15)(16)で馬氏は挿増本を甲・乙二種に分け、「餘呈」の死をめぐる記述から、挿増甲・乙本の成立を、「甲本」「評林本」「乙本」の順であるとす。しかしここでは原來の巴黎本を代表とする所謂「挿増本」として考える。

(19) 前掲注(18)の馬説に従えば梵帝崗本は評林本より後の成立である。しかし先に見た分巻の状況・回目の異同より、評林本・劉・黎本と梵帝崗本との結びつきが強いと考えられること、梵帝崗本と巴黎本とを對校した結果、巴黎本の字句はほとんど出入なく梵帝崗本に繼承抱含されていることにより、ここでは梵帝崗本を用いる。

(20) ここで駢語を詩詞の類に含めて扱うのは、散文に對する同種の要素と見なせること、鄭振鐸が話本・小説に挿入されるこの種の詞を「挿詞」

と呼び美文要素として取り上げていること、『中國文學論集』所收「明清二代の平話集」、挿入位置の特徴や役割りが詞とほぼ同様であると考
えることによる。

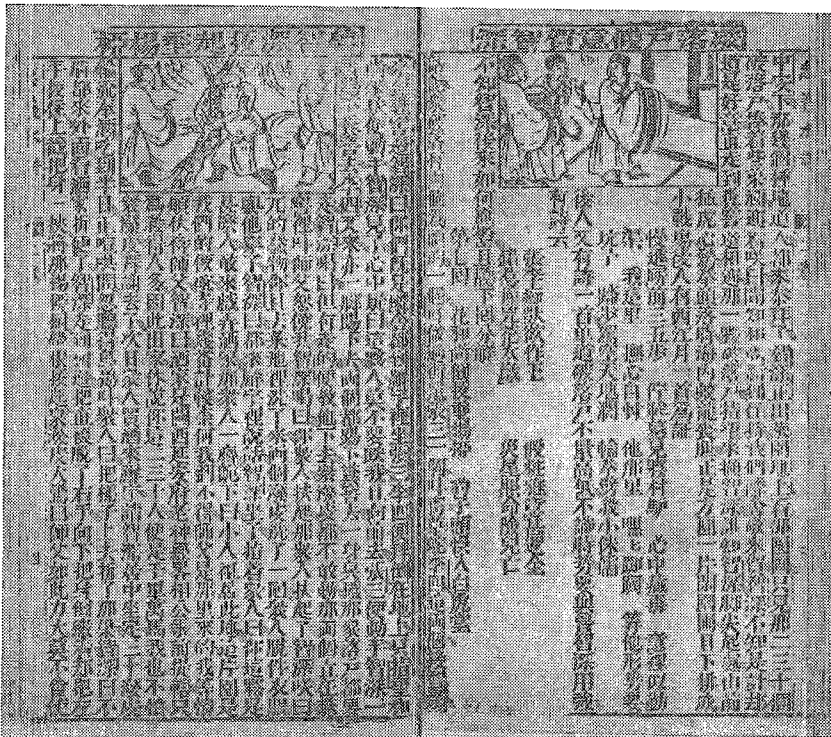
(21) 前掲注(4)。なおこの拙稿(4)では駢語を一括して詞の類に編入して
數値化してしまっている。

(22) 前掲注(4)及び(21)。百回本が詩五一六首、詞三二二首で比率はほぼ
五對三。百二十回本が詩二九三首、詞二七八首で比率における大差はな
い。

(23) 劉・黎兩本の挿入詩詞は、引首の詞(「人稟陰陽二氣」に始まる)と
第六回末尾の西江月一首、七絶一首、及び第四十二回中の「又李卓吾先
生詩」と題する七絶一首の計四首を除いた他は、結びつきの程度に深淺
はあるも、すべて百回本中に見られるものと關係する。今舉げた四首の
中、引首の詞は評林本とほとんど同じであり、第四十二回中の七絶も前
書を「後仰止餘先生觀到此處」として評林本に挿入されている。



劉興我本



黎光堂本